

—第31編— カタルシスとしてのオルタ

建築史家S・ギーディオ^{*1}ンが『時間・空間・建築』の中で指摘したように、ベルギーの独特な歴史的背景に基づくりベラルな市民社会の存在は、近代においても芸術文化の領域で重要な役割を果たしてきた。その黎明期に輩出したファン・アイク、ブリュウゲル、ルーベンス等の画家たちの仕事は言うに及ばず、ヴァン・デ・ヴェルデ^{*2}、ヴィクトール・オルタ^{*3}等が活発な動きを見せた19世紀末のブリュッセルは、大陸における当時の現代芸術の重要な拠点であった。



写真 31-1 オルタ邸正面

ギーディオンによれば、それは英国のモリスやラスキンの流れを汲む美術工芸運動の、大陸における出発点でもあった。この位置づけは、アール・ヌーヴォーから来るべきモダニズムへ移行する際の、「カタルシス（触媒）」的な背景の存在を意味するものである。

オルタ邸（1898年、写真31-1.. 右隣のアトリエとともに現オルタ美術

*1
Sighfried Giedion
(1888~1968)
スイス人建築史家批評家

*2
Henry van de Velde
(1863~1957)

*3
Victor Horta
(1861~1947)

館)を見ると、そんな息吹を感じることができる。彼は装飾様式としてのアール・ヌーヴォーを建築に取り入れた最初の建築家と言われるが、当時席卷し始めていた鉄とガラスという産業革命がもたらした新たな建築材料を生活空間に優雅に持ち込むことによって、モダニズムの黎明期を準備したといってもよいだろう。天井のガラス屋根から一階のホールまで貫く螺旋階段は拡散する日光に溢れ、優雅に纏わりつく鑄鉄とフラットバーの繊細な曲線は構造の一部を担いながら、アール・ヌーヴォー（新芸術）の精神を美しく表現している。

ブリュッセルを訪れた者は、そこが歴史の断片の数々が余り脈絡を見せずに併存・集積しているまちなちであることに気づくだろう。明瞭な構造や様式が全体のイメージを統一しているのではなく、ラテン+ゲルマン+aを反映した、雑多な要素の集合とも言えるベルギーの首都は、大陸の大都市の中でも極めて独特な雰囲気で満たされている。複数のゾーンの交点は時に全体の中心となり、時にそれぞれのゾーンの辺境となる。恐らくは、かつてのオルタのような、鋭敏なカタルシスの存在の有無がその分かれ目となるのだ。

今や欧州共同体の中枢が置かれるブリュッセルで、それらの痕跡を追いかけてみるのも一興である。



写真 31-2 オルタ邸アトリウム

*4
Brussels: ベルギーの首都およびEUの実質的首都